

別記様式（第 5 条関係）

会 議 録

会議の名称		令和 6 年度 第 7 回行政評価委員会
開催日時		令和 6 年 1 月 1 5 日(水) 午後 5 時 0 0 分から 午後 6 時 3 0 分まで
開催場所		市役所本館別館 1 階 大ホール
委員名		(1) 出席委員 加留部貴行、橋内京子、木本圭子、芹野千佳子、中 川孝晃、山下永子、近藤春生 (2) 欠席委員
所管課職員職氏名		福津市長 原崎智仁 事務局 経営企画部長 花田積 経営企画部経営戦略課長 向井泰博 経営企画部経営戦略課経営戦略係長 山本素子 経営企画部経営戦略課経営戦略係 首藤春風
会 議	議 題 (内 容)	最終答申
	公開・非公開の別	☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開
	非公開の理由	
	傍聴者の数	2 名
	資料の名称	
会議録の作成方針		☐ 録音テープを使用した全文記録
		☒ 録音テープを使用した要点記録
		☐ 要点記録
		記録内容の確認方法
その他の必要事項		

審議内容 （発言者、発言内容、審議経過、結論等）

1. 会長あいさつ

会長）

本日は今年度の最終答申を行う。その中で各委員の皆さまや市長からお話を
していただきたい。

2. 答申

○市行政改革大綱等の進捗状況の点検及び評価

（1）ワークライフバランスの推進・業務効率化について

原崎市長）

業務量の把握について、かつて主要施策の成果報告書を現在よりも詳細に作
成していた時期があったが、作成の事務量を考慮して簡略化した。しかし、
現在 DX を進めデジタル等で代替できる業務を模索している中で、改めて業
務量の把握が必要であると感じた。

ストレスチェックについて、ライフの視点も重視することで本来の意味での
ワークライフバランスを実現したい。

機構改革について、これまで基本構想に基づき、迅速に対応すべき事項に
ついては機構改革により担当部署を作るなどにより対応してきたが、外部か
ら見ると頻繁に変わっているように見えたことと思う。理由があつての機構
改革ではあったが、職員のストレスとなること等ご意見は重く受け止めた
い。

DX について、本来の意味をしっかりと踏まえたくて今後も検討する必要があ
ると思った。

（2）クラウドファンディングについて

委員）

クラウドファンディングは財源確保の手法の一つではあるが、寄付者が「プ
ロジェクトに参加している」という気持ちを持つことができるなど、ウェル
ビーイングの向上につながる効果がある。そのため、資金を得る手段として
だけでなく、市民や福津市に関心のある市外の方とつながる手段として活用
することを検討いただけると良い。

原崎市長）

現在、福津市 20 周年記念誌の作成のためにクラウドファンディングを行って
おり、福津市民だけでなく、福津市から巣立った方、関心のある方などから
広く寄付を募っている。

これまで活用した事例が少なくシステムが確立していないが、今後クラウド
ファンディングをうまく活用して、皆様に福津市を支えていただけるような
まちづくりをしていきたい。

また、職員が事業化、政策立案を行う際の意識改革の側面からも活用した
い。

（3）公衆便所について

原崎市長）

インバウンドの方が日本に来て感動することの一つにトイレの清潔さがある。

公衆便所を観光に活かすというご意見は希少である。大任町の「一億円のトイレ」の例からも、公衆便所は人を呼び込む力があると思う。防犯カメラの設置等には資金が必要であるが、ネーミングライツ等により民間企業にも資金面からご協力いただけると良いと考えている。元々公衆便所を減らす方向で大綱にあがっていたが、運営方法等の見直しを行って活かす方向も検討していきたい。

（４）本木川自然公園（ほたるの里）について 委員）

学校との連携について検討してほしい。高校では探求学習等のフィールドを探しているため、ニーズがあるのではないかと思う。

豊田市では学生や市民が地域の生態系の研究として昆虫や魚の採集等を行い、そこから市立の博物館を設立するという事例があった。博物館を設立するまでには至らないにしろ、地域の生態系の研究や保全を行う場としてほたるの里は活用できるのではないかと思う。

原崎市長）

ほたるの里は公園が作られる前には銅山があり、きれいな水源がある。そのため、水源をしっかりと守る必要があり闇雲に開発を行うわけにはいかない。元旦にもたくさんの方が訪れており、大きな可能性を秘めている。答申にもあったように、建設課だけでなく他部署とも連携して活用方法を探っていければと思う。

直営は維持管理費がかかるため、自然を守りつつ民間企業に活用していただくという形が良いと考えているが、しっかりと探求したうえで進めていきたい。

○まちづくり基本構想の施策の進捗状況の点検及び評価

（１）施策 7-1

委員）

多くの方が遠くから訪問、消費をして帰っていくという観光の形では、すり減ってしまい持続可能ではないと感じる。「福津市を好きだ」という方と継続的に関われる形を模索できれば良い。

委員）

委員と同様である。ニューヨークタイムズが選定する世界の観光地で、今年は福井と大阪が選ばれた。福井を訪れた際に夕陽の美しさをアピールされたが、福津市でも同様の景色を見ることが出来ると感じた。まずは、市民が福津市の良さを再発見し、お金を落とすという新たな観光の形を検討しても良いのではないかと思う。郷育カレッジでもそのような視点で今後アピールしても良いと考えている。

委員）

郷育カレッジは市外からお金を払ってでも参加したいと思える講座になっていると感じる。春日市が行っているアートマネジメント講座は、春日市の良い取組を学びたいという人で定員いっぱいになっていた。福津市においても

福津市の良さや暮らし方を学ぶという新たなコンテンツにすることが出来るのではないかな。

原崎市長)

福津市ではこれまでも量よりも質を求めてきた。例えば、ふくつ暮らしの旅は定住施策として始まったが、このような取り組みが観光にもつながるのではないかなということ、第2期基本構想では観光を柱の一つとした。

市民が福津市の良さを実感、再発見しながら暮らしていくことができれば、外にもそれを伝えていけるのではないかな。

郷育カレッジの市外開放については、目指すべき観光の在り方であると思う。

(2) 施策 4-2

委員)

福津市は子供が多くいる中で、登下校の時間に交通量が多いとのびのびと安全に通学できないため、時間による交通制限を設けるといったことも検討してはどうか。

委員)

福津市では道路が整備されていないと感じる部分もあるが、道路を整備して便利にすると却って交通量が増えて混雑度が上がるといった悪循環が発生する場合もある。そのため、どのようなまちづくりを行いたいかなということ、副次的な効果も含めて検討する必要がある。

原崎市長)

地域公共交通について、運転士不足といった課題が出てきている中で不断の取り組みが必要と感じている。

道路について、10年ほどの間に新たな道路ができたことで、渋滞が緩和されたエリアも交通量が増えたエリアもあり、評価が難しい。

道路補修箇所の早期発見について、議会でご意見をいただいたこともあり、LINEの活用は良い手段だと思う。

津屋崎千軒のエリアなどは子供たちが路地でのびのびと遊んでいる風景がよく見られる。そのような場所を大切にしていきたい。

未来共創センターでの共働について、既に行政課題を未来共創センターに相談している事例がある。今後も未来共創センターが行政、市民、企業等をつなぐ役割を発揮できるよう育てていきたい。

子どもたちのボランティアは自尊心の向上や福津市の良さの発見など、子どもの成長に良い影響が多くあるため、そのような部分を大切にボランティアを募っていきたい。

土地の有効利用について、安心安全なまちづくり、活力あるまちづくりをするために市としても検討する必要があると考えている。

○全体についての所感

委員)

今回取り上げたテーマは市民として身近なテーマであったが、掘り下げの中で知らないことも多くあった。福津市に良さを感じて転入したものの、住ん

でみたら不便だった、良くなかったということが無いように取り組んでいただきたい。

委員)

自分が今まで訪れる機会が少なかった公園などのテーマでは学ぶことが多かった。

職員のワークライフバランスについてはずっと改善していただきたいと感じていたため、今回取り上げることができて良かった。仕事をする中では「ライフ」の状況を表に出しづらいため、仕事が過度な負荷となり心身をむしばんでしまうことがある。

職員が笑顔で働き、市民も笑顔で市役所に来るといった風景が実現できると良い。

委員)

ここで出たアイデア等を活かして取り組んでいただきたい。一方で、市長には夢や理想を語るだけでなく、コスト面等厳しい部分にも目を向けて考えたうえで取捨選択の判断を行っていただきたい。

委員)

ほたるの里について建設課だけが動いていたように、他の部署を上手く巻き込むことが出来ていないと感じる。福津市だけでなく組織化がしっかりされているところほど役割が硬直化しがちである。しかし、VUCAの時代の中ではプロジェクトチームの立ち上げや人材交流などの組織制度の施策、また、巻き込んで物事を進めるといった形で組織へ貢献した職員の人事評価を高めるといった人事評価制度面の施策を検討してほしい。

新しいことに取り組む際には様々な検討を行う資金や人手の余裕が必要である。人口増加が進む福津市では、上手く横のつながりをつくることで、あまりお金をかけることなくブレイクスルーすることが出来るのではないか。他自治体との差別化を図るためにも、上記のような取り組みを検討してほしい。

委員)

担当課の職員が最初は身構えているものの、会議を経て前向きになる姿が印象的だった。どの部署においても所管事務に対して真摯に取り組んでいる一方で、専念するが故に新しい視点や方法には気づきにくい傾向があると思う。また、ワークライフバランスの視点から見ると、別の方法を模索する時間的、心理的余裕がないともとれる。新しいことを模索することは負担にもなるが、前向きな挑戦を後押しする空気が醸成できると良い。

委員)

多くのテーマにおいて連携の視点が出てきたため、意識的に取り組んでほしい。

また、自治体の境界をとりはらって市の財産を広域的に共有し、活動を広げるということにも目を向けてほしい。

会長)

ワークとライフ、観光と暮らしなど二極対立ではとらえられない、言語化できない狭間の部分が多く表れたテーマだった。これまでの行政の捉え方で取り組んでいくには限界を迎えている。新たな価値判断を行うにあたっては、行政だけでなく産官学民が共働して向き合う必要がある。

また、全てのことに取り組めるわけではないので、目的や対象を常に意識してほしい。組織としては既に限界を超えていると思うので、これ以上先送りせず取り組んでほしい。

○市長より

原崎市長)

答申に対して感謝する。長として、市民の方からのご理解をいただきつつ、職員に過度な負担がかからないよう対話をしながら進めていきたい。全てを行政が担うのではなく、民間に担っていただくことも必要である。

市民、職員のウェルビーイングを向上できるよう、ビジョンを持って行財政改革に取り組む責任があると再認識した。

(市長退室)

3. 委員より今年度の振り返り

委員)

今回は担当課のみを呼びコンサルティング的に進めたが、事前に意見を集めることができれば、当日関係する部署を呼ぶといった方法もとれる。担当課が後から関係課に行っても空気感が伝わらないため、一緒に出席してもらった方が効果的である。

委員)

担当課の「進めたくても進められない」というジレンマを感じた。本委員会において、より支援できる方法があればと思う。

委員)

自分は今年度も論点となりそうな部分について事前質問を出していたが、出席してほしい部署を要求するといった方法もあると思った。

また、決定までのスピードを早くする必要がある。専門家が集まる本委員会の中で方向性まで固められるような仕組みが作れると良い。

委員)

10年前も同様の意見を述べた記憶があるものもある。全てが答申通り進むとは思わないが、財政が厳しい中で無駄なことを続けられないよう、全体的な視点で考えてスクラップアンドビルドを行う必要がある。そのためには、市長のリーダーシップや職員の覚悟、市民の理解が必要である。

委員)

自分が市役所に問い合わせをする際に、同じ問い合わせに対して部署により異なる回答をいただくことがあり、横の連携が取れていないと常々感じる。委員の皆さんの様々な角度からの所見は、担当課だけで検討していても出てこない発想が多くあると思う。同様に関係部署と一緒に知恵を出し合ってい

けると良い。異動があるからこそ、同じ部署で働いていた人が異動したときに、その視点からの話を聞くといい交流をもっとするとよいと思う。

委員)

一番怖いのは市民が市に対して無関心になることである。市民一人一人が地域に関心を持てるまちづくりができればと思う。

会長)

行政評価委員会を以前行っていた時よりも課題が多く積みあがっており、課題の質が悪くなったと感じた。10年後も同じ課題について取り上げることになるのではないかと懸念している。

早く取り組んでおけばよかったのにと怒りを覚える場面もあった。課題の解決や決断を後回しすることが福津市の悪い癖になっているのではないかなと思う。優しい職員が多く穏やかなまちであるのがいい部分であるが、それ故に芯が無いと感じる場面がある。それを再認識して一つでも課題を解決できるよう進めていただきたい。また、そのためにも心身の健康が大事である。

4. 閉会あいさつ

会長)

一年間のご尽力に感謝する。

本委員会は、今後福津市が良いまちになるかどうかの一端を担っていると考えている。今後も現場の力を信じて進めていきたい。